

## 西山證空の念仏觀

高 城 宏 明

念仏とは、「仏を念ずること、憶念すること。仏の相好や功德を心に想い念じること」は、觀念の念仏といい、仏教一般において重要な行法として展開する。浄土宗における念仏は、南無阿弥陀仏と六字の名号を声に称えること。<sup>(1)</sup>などと定義されているように、一般的には、仏の理法を念ずる法身念仏や、浄土（仏国土）、仏・菩薩の相や功德を觀想することを意味するが、特に法然の立教開宗によって念仏に新たな意義がもたらされて「南無阿弥陀仏」の名号を声をもって称えることが提唱されたのである。

また、法然は、その著『選択本願念仏集』において『無量寿經』、『觀無量寿經』、『阿弥陀經』を浄土三部經とし

て法然浄土教正依の經とすると共に、己証の教義を善導の本願念仏に求めた。中でも、善導著『觀經散善義』上品上生、深心積の「一心專念弥陀名号、行住坐臥、不問時節久近、念念不捨者是名正定之業。順彼仏願故。」文は選択本願の根柢となり、また、『無量寿經』第十八願の「乃至十念」についての善導著『往生礼讚』、『觀念法門』における「下至十声」説は「念声是一」を唱えることにつながったのである。

法然に影響を与えた善導は『觀經玄義分』宗旨門に「今此觀經即以觀仏三昧為宗。亦以念仏三昧為宗」と示し、「同書」和会門、別時意積では「言南無者即是歸命」、「言阿弥陀仏者即是其行」を、また、『觀經定善義』真身觀釈

において「衆生憶念仏者。仏亦憶念衆生。彼此三業不相捨離。故名親縁也」と説いて弥陀と衆生の関係を論じた。

さらに、『観経』所説の三心について「観経散善義」上品上生釈の内、回向発願心釈では「三心既具、無行不成」を説くなどしたが、これらは證空の教学に直接的影響を及ぼしたとも考えられるのである。

本稿では、「西山證空の念仏觀」と題して證空がその師法然が提唱した称名念仏をどのように捉えたかを取り上げることにするが、これには、證空の阿弥陀仏觀なり、衆生（凡夫）觀、至誠心等『観経』所説の三心積などを根底とするものと考えられ、また、證空が阿弥陀仏と衆生の関係をどのように見ていたかを知ることも必要であると思われる。これらについては既出の拙稿等に委ねることとし、以下では、「一、念と声について」、「二、不相捨離について」、「三、念仏の意義と観経の念仏」、「四、願行具足と行願具足」、「五、行願具足に基づく名号觀」、「六、證空の説く念仏」の観点により、證空の念仏觀を考へることにする。

## 一、念と声について

證空は『観念法門自筆御鈔』巻上において、

念心既ニ徹レバ、必ズ声ニ顯ハル。世間ノ苦樂共ニ声ニ顯ハレテ、心ノ底ヲ示スガ如シ。今仏ニ歸命スル志極マレバ、其ノ思ヲ声ニ顯ハスベシ。況ンヤ名ハ必ズ体ヲ召ス。弥陀弘願ノ体ニ歸セバ、彼ノ仏ノ名号ヲ称ヘテ、三業共ニ他ナキ謂ヲ顯ハスベキモノナリ。

としている。つまり、我々衆生が現世、平生において阿弥陀仏を思う心が極まったならば、その思いは必ず声に顯れるものであるというのである。我々が日常の生活をおくる内において、苦しさを、或いは楽しさを感じる時、また、その他の心的感情においても、それらの感覚が強ければ強いほど、自身の意志に関係なく心の思いを思わず声に出してしまうのと同様に、まさに今弥陀に帰依する思いが定まった時には、その思いは自ずと声に顯れるものであり、さらに言えば、證空教学における「阿弥陀仏觀」に基づく弥陀の本願の謂われが関係するのである

が、この本願の謂われを知り、弥陀に対する帰命の心が起こつたならば、その思いは必ず「南無阿弥陀仏」と称えることにつながり、その事で仏と衆生の身口意三業が一体であるとの謂われが積極的に顕われるともいうのである。

ところ、それまでの法身や観想の念仏に新しい意義を見出して六字の名号を声に出して称えることとした法然の念仏観における「念と声」について、證空は、その著『西山善慧上人御法語』に次のように述べている。すなわち、<sup>(3)</sup>

諸經の心にては止悪修善せずしては生死解脱のいはれあるまじきを、今の宗のころ、正覺の体をきくまへには、止悪修善せずしてはかなはじといふべき事にてはなきなり。さては止悪修善せずとも、とはいはるまじき也。一善一法の外に名号の体もなく仏の覺体もなきゆへに、一善一法を修すべきにてあるなり。かく心うれば邪見と自力とが破れて除く事也。仏の内証の智慧が名にきはまりて、仏のさとり様のをきけば迷の衆生なき也。一代の定散を南無阿弥陀

仏の体ぞと説入れたるこそ觀經の体にてはあれ。仏をも阿弥陀仏と説くべきを生諸仏前と説きて、地体諸仏の功德は皆弥陀の功德にて凡夫に成じてあるらん事のうれしさよと仏をたふと思へば、此の心の中に一切の諸仏如来入集りて衆生のまよひの心をも、おしむ命をもおさめとりて一体にして、衆生を仏の体として仏にならせたまひたる故に、仏が往生の体にてはあるぞとは申す也。かく心得るが即ち南無阿弥陀仏にてある故に、心に思ふも、口に唱ふるも一にてある故に、念声一体とは申す也。南無阿弥陀仏と唱ふるこえのところに念あり、念のところに声ある也。されば我等が口に南無阿弥陀仏と唱へ、心に此のいはれを思ふ此外に三世十方の諸仏もましまさず、十方の浄土もなき也。此謂れをきく外に仏の正覺もなく衆生の往生もなき也。此のいはれをしるを三心ともいひ菩提心とも云ふぞと心うるなり。としての。まずここでは、通仏教的には、諸々の經典が、また、それらの經典を教義とした諸宗派が説くように、悪行をやめ善を修めなければ生死輪廻を離れ、悟り

を得ることを求める道理が立たないのであるが、今宗すなわち浄土の教えでは、阿弥陀仏の正覚の謂われを聞くことに意義を認めるから、止悪修善せずには生死解脱が得られないというわけではないとする。とは言え、この事で止悪修善など必要ないと言うわけではないのであるが、一善一法、ここでは念仏のことを指しているのであるが、この念仏以外には「南無阿弥陀仏」すなわち、名号の主体、さらには阿弥陀仏そのものもないのであるから、我々衆生としては念仏を実践すべきであるとするのである。また、我々が阿弥陀仏の意義を知り、心得ることが出来た時には、衆生の間違つた見解がなくなり、またこの時には自力の思い計らいもなくなると言うのである。ただし、衆生の内面のこれらの変化は、決して凡夫たる衆生発動の変化ではなく、あくまでも仏の内面にある智慧が名号に表れるからこそ、その仏の悟りの謂われを知ることでもはや煩惱に迷う衆生ではなくなるとするのであって、我々衆生に求められる何にも増して重要なことは、弥陀の正覚に一切衆生の往生が成就している道理を領解することであり、今の資料で言えば、「かく

心得るが即ち南無阿弥陀仏にてある故に」と示して、その上に、心に思うこと、口に唱えることを同じとした念声一体を説くのである。ここに言う念声一体というのは、「南無阿弥陀仏」と声に出して唱える時には、必ず念いがあり、また、念いがあれば必ず声にあらわれるという意であつて、決して口称を必要条件とするものではないのである。すなわち、この口称の扱いについて、證空は『西山善慧上人御法語』に、<sup>(4)</sup>

されば念仏申して往生をするにはなくて、南むあみだ仏が往生の体にてある故に、唯念仏申せとはす、むる事にてある也。南無阿弥陀仏と申すを行にして往生せむとする時は、仏もむかへず凡夫も往生すまじき也。行と云ふは南無阿弥陀仏の名号を行とはいふ也。此の行が凡夫に成じたるを念仏の行者とは云ふ也。数をとりて念仏申すを行者とはいはぬ也。又往生の体を名号と云ふ也。(中略)南無は迷の衆生の体也。覺りと云ふは阿弥陀仏の体なり。この二が一になりたる所を仏につけては正覚といひ、凡夫につけては往生と云ふ也。此の謂れをこゝろえたる

を、三心とも帰命とも南無とも発願とも帰依とも正念とも憶念とも菩提心ともあまたに申す也。よくよく心うべき也。かく心えたる所がやがて名号にてはある也。必ずしも口にとなへたるばかりが名号にてはなき也。念声一体と云ふはこれにてあるなり。此の謂れをこゝろえんずるを即便往生ともいひ、機法一体ともいひ、証得往生とも云ふ也。仏の悟りが衆生の往生の体にて、衆生の往生の外に仏の正覚もなき也。此の南無と云ふはまさしき我等が体なり。則ち三心也。三心と云ふは心うる心也。心うると云ふはしるなり。

としている。ここにおいて證空は、我々衆生が念仏をすることで往生できるのではなく、「南無阿弥陀仏」の名号そのものが、我々衆生の往生の主体であることを述べて、「ただ念仏申せ」と勧めるだけなのであるというのである。仮に「南無阿弥陀仏」と唱えることを我々の行として捉え、念仏を實踐行として往生しようとする場合には、仏の来迎もなく、凡夫が凡夫のままに往生することなど到底できないといい、「ただ念仏申せ」と勧める

にしても、決して数多く称えることで念仏の行者となることを求めているのではないのである。ここで重要かつ必要な事は、我々衆生の往生の本体が名号であると知ることなのである。すなわち「南無」は迷いの衆生の体、「阿弥陀仏」が覚りの体であつて、「南無」と「阿弥陀仏」の二つが一つになったところを仏について見れば正覚であるとし、凡夫については往生であるとして、この名号の謂われを心得ることを重要とするのであつて、これが名号だといふのである。だから、必ずしも言葉に出して称えることのみを名号といふのではないのであつて、これを念声一体と表現している。また、證空独自の名号観である弥陀正覚の謂われを心得たところを即便往生、機法一体、証得往生とすると共に、阿弥陀仏の覚りがそのまま衆生の往生であり、逆に見れば衆生の往生以外に阿弥陀仏の正覚はないと心得る心が『観経』所説の三心ともいふ證空の三心観にもつながるのである。

## 二、不相捨離について

善導は『観経定善義』真身觀釈において、三縁を説く  
中、「彼此三業不相捨離、故名親縁也」と示すが、證空  
はこの「不相捨離」を通じて弥陀と衆生の關係を論じて  
いる。すなわち、『女院御書』下巻において、<sup>(5)</sup>

故に念仏と申はすなはち南無阿弥陀仏の六字なり。  
それと申はまさしく他力往生の行なり。念仏の姿を  
ば觀経には撰取不捨と説あらはし候なり。その撰取  
不捨と申は、念仏の行者を仏の光明の中にをさめと  
りて捨給はざる義なり。そのゆえは、仏と行者と一  
つにして離れざる所を撰取不捨とは申なり。しかれ  
ば仏の三業をはなれて行者の三業もなく、行者の三  
業をはなれて仏の三業もましまさざるゆえなり。か  
くのごとく仏を念ずる念の中に、阿弥陀仏の覺体ま  
さしくいりて正覺を取たまへるなり。こゝをもちて  
彼此三業不相捨離とは申なり。仏と行者とはなれざ  
る姿を南無阿弥陀仏の六字の名号とは申侍るなり。  
と述べている。まず、念仏とは「南無阿弥陀仏」の六字、

他力往生の行であるとし、その姿は『観経』第九真身觀  
には撰取不捨と説かれることを示した上で、念仏する者  
を弥陀の光明に救い取つて見捨てない意味とし、阿弥陀  
仏と念仏の行者が一つになり離れないことだとしてい  
る。さらに、弥陀と衆生の關係は、どちらを主体として  
も、一方の三業が別のものではないという弥陀と衆生の  
三業の不相捨離を説くのであるが、この事は衆生すなわ  
ち弥陀を念じる衆生の心の中に阿弥陀仏という悟りの本  
体が入ることであり、この時にこそ、弥陀の正覺が成就  
するのであるとしている。

また、『略安心鈔』にも<sup>(6)</sup>

南無阿弥陀仏と称する心を正因正定の業と名く、此  
の南無の心は我等がほとけを憑むころなり。阿弥  
陀仏とは憑む心を彼の仏の撰し給ふ他力不思議の行  
体也。されば、我ころを南無と云ひ、彼の仏の我  
を撰したまふをば阿弥陀といふ。彼此一つに成りあ  
ひたる姿が即ち仏にて御座処を南無阿弥陀仏と申な  
り。然らば、觀経の第八の觀に「諸仏如来はこれ法  
界の身として一切衆生の心想に入り玉ふ」と説くは、

凡夫の心のいみじく悟て仏とまぢるにはあらず。も

とより「以無縁慈摂諸衆生」の謂れにて彼の想心の

仏凡夫のころの中を離れたまはず。故に「是心作

仏是心是仏」とは説なり。さて真身観に至て「一々

の光明念仏の衆生を照して摂取して捨てたまはず」

と説くなり。是を「彼此三業不相捨離」とは釈する

なり。是をもつて、往生といふは仏の御心と我心と

一に成りあひたる所を申すなり。

としている。ここにおいても、六字の名号は衆生の「南

無」と衆生を摂取不捨する「阿弥陀仏」とが「彼此一つ

に成りあひたる姿」として弥陀の身口意三業と衆生の三

業が離れないことを表し、とりわけ意業に関して、『観經

像觀の「諸仏如来是法界身、入一切衆生心想中」文に關

して、仏の心と衆生の心が一つになることを言うのであ

るが、これは我々凡夫が悟りを得たことで実現する「是

心作仏」ではなく、「阿弥陀仏とは憑む心を彼の仏の摂

し給ふ」という仏の側に「南無の心は我等がほとけを憑

むころ」の我々凡夫を摂取する謂われによって成立す

る關係であり、この事に気付いた衆生の姿、心の状態を

「是心是仏」とも言うのである。

### 三、念仏の意義と觀經の念仏

これまで見てきたように、阿弥陀仏と衆生の關係その

まが六字の名号であると言るのであるが、證空は念

仏ということばの意味合いをどのように捉えていたので

あるうか。すなわち證空は、『女院御書』上巻において、

但し念仏といふは、仏を念ずるなり。仏を念ずると

いふは、其仏の因縁をしりてその功德を念ずるを真

の念仏とはいふなり。しかるに念仏について二つあ

り。一には諸經の念仏、二には觀經の念仏なり。（中

略）これによりて諸經の念仏の成不成は偏にこれ自

の心の悟ると悟らざるとによるなり。

二つには觀經の念仏といふは、南無阿弥陀仏これな

り。これ極悪深重の苦機のうへに成ずる別願所成の

称名なり。故にたとひ相好を念ずれども、かならず

しも思をやめ心をこらすべしとも願ぜざれば定善に

もあらず。また口に名号を称すれども、正しく悪を

廢し善を修すべしとも誓ひ給はざれば散善をもはなれたり。若しそれ定善を本願とせば、思ひをやめ、心をこらさざるものは捨られぬ。散善の修行はすべて往生すべからず。もしそれ散善を本願とせば、悪を廢し善を修せざる凡夫はきはるべし。また造悪の輩はながく生死を出べからず。これによりて弥陀の本願といふは定善にもあらず散善にもあらず。只これ定散の上にならず他力の一行なり。

としている。これによれば、念仏というのは、まず、仏を念ずることであるとし、また、仏を念ずるといふことは、阿弥陀仏の因縁を知り、その功德を念ずることであるといふのである。さらに、證空は、念仏に二つ、すなわち諸經の念仏と觀經の念仏があるとされている。その中、諸經の念仏は、その成立如何が専ら衆生の心が悟れるか悟れないかによるとするのであるが、觀經の念仏は、「南無阿弥陀仏」であり、極悪の罪業深重の苦しみ多い衆生であつても可能な弥陀の特別な本願によるところの称名であるとしている。この念仏は、たとえ仏の特相を念じたとしても、必ずしも心の禪定を目的とする念仏ではな

いので定善でもないとし、また、口に「南無阿弥陀仏」を称えたとしても、止悪修善を誓うものではないことから散善とも異なると言うのである。もし仮に、定善による念仏を弥陀が本願に定めたのならば、精神の統一を圖れない衆生は捨てられることになり、それ以上に散善の行では全く往生できないことになるのである。一方、もし仮に散善を実践する衆生を弥陀が本願に定めたならば止悪修善のできない凡夫は、救済の対象から外れることとなり、とりわけ下品造悪の衆生は、永久に生死輪廻を繰り返すことになるから、弥陀の本願は、定善でも散善でもなく、定散二善を超越した他力の行なのであると言ひ、何よりも重要なことを阿弥陀仏が弥陀たる因縁、すなわち、阿弥陀仏の謂われを知ることと定めるのである。

#### 四、願行具足と行願具足

善導は『觀經玄義分』和會門の別時意釈において『撰大乘論』によるところの、いわゆる撰論学派の往生別時意説に対して「今此觀經中十声称仏、即有十願十行具足。



云何具足。言南無者即是歸命。亦是發願回向之義。言阿彌陀仏者即是其行。以斯義故必得往生。」との願行具足論を展開したが、これについて、『述成』には、<sup>8)</sup>  
<sup>9)</sup>

南無を本として、是に阿彌陀仏を具足する所は、願行具足の南無阿彌陀仏にてあるなり。是を觀仏三昧と名付くるなり。阿彌陀仏を体として、是に南無を具する所を、行願具足の、阿彌陀仏の南無にて、仏体が本となりて衆生を撰取るなり。是を念仏三昧の歸命の仏体に付くとは申すなり。然れば往生を判ずるには、行願具足して往生すべきにて、一心廻願往生淨土為體と積して、衆生の往生を以て彼の仏の成仏の體と心得る時、往生は決定するなり。是を一切善惡凡夫得生者等と積するなり。此の依文の法門より念仏に入らんとするは、觀仏三昧より念仏に入る故に、端より奥にいたるは大事なり。此の玄義念仏三昧の道理を心得ての上に、依文に付きてあきらめ沙汰するは、是れ奥より端に至る故に易きなり。されば唱ふる功によりて往生するぞと申すにはあらず。仏体が往生の體にてありけりといふなり。是を

能く能く心得べきなり、と仰せられきとなり。

とあり、證空による願行具足の理解がここに見られるのである。證空は、南無を衆生の發願歸命する姿を中心に、その衆生の歸命する対象としての阿彌陀仏があると考えた立場は願行具足の「南無阿彌陀仏」觀仏三昧であると言ひ、この時の衆生の發願は絶対的他力の姿とは言えないとする。願行具足に対する證空の眞の捉え方は、阿彌陀仏を中心に南無を考えることで、これを「行願具足の「南無阿彌陀仏」と言ひ、阿彌陀仏が衆生を念う大悲の心を南無、一切の衆生を救い取る覺體を阿彌陀仏として、南無と阿彌陀仏どちらも阿彌陀仏に則して捉えるのである。また、その所を「念仏三昧の歸命が仏体に付く」とも表して、衆生の往生は、行願具足によるこの往生であり、衆生に必要なことは、一切衆生の往生が阿彌陀仏という正覺の本体に決定していることを心得ることだと示すのである。さらに、『觀經』を觀仏三昧の立場で捉える場合には、序分から正宗分へと依文積義の立場であり相当な時間がかかることとなるが、文前玄義の立場、すなわち、念仏三昧の道理を理解した上で序分等を明ら

かに行きくならば、理解も早く、さらに容易であると言うのである。これらの事から、我々衆生の往生は、たとえ一念たりとも衆生が称えることの功德によつて往生できるとするのではなく、阿弥陀仏の存在そのままが衆生の往生そのものであることをよく心得るべきだということである。

### 五、行願具足に基づく名号観

先のように六字の名号について願行具足を基本とし、願行具足の「南無阿弥陀仏」を説きながらも、證空の独自の理解は、行願具足の名号だと捉えるところにあると言えるが、證空は、さらに『安心鈔』において、<sup>10</sup>

されば南無阿弥陀仏とは、仏に望れば、十方衆生の心の上に正覚を成んと誓ひ玉へる正覚の体が顕る、なり。我等に望れば、往生の体即仏体にておはしましたる謂を心得知までなり。然ば念仏往生は、只南無阿弥陀仏の外に又求むべきにあらず。唱る名号をおさえて往生の体と知るより外は又往生はなし。か

く心得ぬる上には只称名の一行なり。是以釈云、一心専念弥陀名号行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業。順彼仏願故文と。都て往生の体は時節長短にもよらず、念仏の数にもよらず、只一念の体に極る故に、臨終をも不待平生をも云はず、善知識にあって、今の願行具足の南無阿弥陀仏即ち往生の体と聞き得て信を生ずる計りなり。

と述べ、「南無阿弥陀仏」は、まず阿弥陀仏を中心に据え、その仏があらゆる衆生の心の中に正覚を成就した悟りの仏体自身の顕れであるとする。同時にこの時私たち衆生側にしてみれば、「南無」する姿、こちらから帰命するという極微であつても、ある意味自力的な発動は何一つとして求められるものがあるのではないと言うのであつて、我々衆生の往生は、そのまま阿弥陀仏の側に成就され、阿弥陀仏そのものであるという弥陀正覚の謂われを心得知ることのみが残されているとするのである。つまり、念仏往生を「南無阿弥陀仏」以外に求めるべきではなく、称える名号を我々衆生の往生の根本であると知ること以外に、我々の往生そのものがないことになり、取

り返して考えれば、この事が心得られたならば、称名の一行しかないという事にもなるのである。また、この道理を善導の「一心専念弥陀名号」の文による称名正定業説を承けて證空独自の念仏往生觀を示すのである。すなわち、我々衆生の往生は、どれだけ長く念仏をするかにもよらず、或いはまた、念仏の数の多さを論ずるのではなく、ただ一つ弥陀の正覚の謂われを理解した上で一念の「南無阿弥陀仏」に極まるのであって、この事から平生、臨終を問うことなく何時につけても良い指導者にめぐり会い、願行（行願）具足の「南無阿弥陀仏」に我々の往生の根本があることを聞いて信ずることが重要であるとも言うのである。

## 六、證空の説く念仏

これまで見てきたように、證空の教学において「南無阿弥陀仏」の六字名号釈には独自の理解があり、我々衆生にとって最も重要かつ必要なことは、弥陀正覚の謂われを知り理解することであると云える。この事から、善

導や法然が最も重視した称名が、一段下がった処に位置づく感は否めないが、決してそのように捉えるべきものではないのである。本稿の冒頭「一、念と声について」でも見たように、我々衆生が平生において阿弥陀仏を思う心が極まる時、その念は必ず声となって顕れるものであり、それは丁度、日常の暮らしの中で苦しさや嬉しさが大きければ大きいほど心の叫びとなって声に顕れるようなものであり、この意味から證空の教えの中にも念仏を称名とする考えがあるとも言えるのである。ところが、證空の説く称名念仏は、数量や期間等を論ずることなく、また、称えると言つても単に口業にとどまるものでもないのである。すなわち、『女院御書』上巻には、<sup>(11)</sup>

念仏と衆生としたしといふ事は、身の内にある仏性をさしてしたしといふにはあらず。又四弘六度を修して我と仏にしたしと云ふにもあらず。只これ弥陀の正覚は凡夫の称念を因とし、凡夫の称念は弥陀の正覚を縁として、内外の因縁和合して仏も正覚を成じ衆生も往生を得るによりて、これ親しき義といふなり。故にかの仏はこれ位高く徳おもくし

て、三賢の菩薩もなほ望みをへだて、二乗の聖人もその名をだにも聞ざれば、況や我等愚痴の凡夫、いかがしてか百千劫の中におきて、声をたて、唱へ、身をくだきて礼し、心をつくして念ずるとも、聞たまひ見たまひ知食すべきにあらず。しかれども本願をもちての故に、口に常に仏の御名を称すれば、仏すなはちこれを聞給ひ、身に常に仏を礼敬すれば仏すなはちこれを見たまひ、心につねに仏を念ずれば仏すなはちこれをしるしめす。衆生仏を憶念すれば仏また衆生を憶念し給ふ。憶念といふは一たび其理を心に思ひいれて後あらたまらざる心なり。仏の三業と衆生の三業とあひはなれざるゆえに、親縁といふなり。是則衆生の称礼念すれば仏見聞知し給ふによりて親しき縁といふにあらず。元より仏の御方に親しき謂れましますゆえに、称礼念すれば見聞知し給ふものなり。

として、三縁中、親縁に関して、念仏と衆生とが親しいという事は、衆生内具の仏性や菩薩の修行実践により親しいのではなく、阿弥陀仏の覚体に衆生の往生が実現さ

れている事を以て親しい関係と言うのである。本来仏と衆生との関係を見れば、仏とは位が高く功德多い存在であり、たとえ三賢の菩薩であつても菩提への目標を途中で断念したり、二乗の聖者は仏の名を聞くことすらできないことを述べると共に、ましてや我々愚痴の凡夫が三業に称礼念しても仏には決して届かないとするのである。ところが、阿弥陀仏には『無量寿経』に誓われた本願があるから、衆生の称礼念を仏が聞見知するとし、この事を阿弥陀仏の三業と衆生の三業が離れない親縁とするのである。さらに證空は、善導が説いた身口意三業の不相捨離について、とりわけ意業に関する憶念に注目している。憶念とは、ひとたびその道理を心に思い入れることになれば、その思いを常に保ち続けることであるとし、これは弥陀と衆生の三業の不相離を超えた親縁であり、この関係は衆生が称名、禮拜、念仏することで阿弥陀仏が聞、見、知するというのではなく、本来阿弥陀仏の正覚に仏の方から衆生に親しい謂われがある事で成立するという絶対他力の念仏を意味する離三業の念仏、憶念の念仏を説くのである。

また、證空は、『白木念仏御法語』において、<sup>(12)</sup>

このひじりの意巧にて人の心得やすからむために、自力根性の人にむかひては、白木の念仏といふ事を、つねに申されにけり。その言には、自力の人は、念仏をいろどるなり。(中略)

大經の法滅百歳の念仏、觀經の下三品の念仏はなにも、のいろどりもなき、白木の念仏也。本願の文の中の至心信樂を、称我名号と釈給へるも、白木になりかへる心也。所謂觀經の下品下生の機は仏法世俗の二種の善根なき無善の凡夫なるゆへに、なにの色どり一もなし。況や死苦にせめられて忙然となる上は、三業ともに正体なき機なり。一期は悪人なる故に、平生の行の、さりとるとたのむべきもなし。臨終には死苦にせめらるゝ故に、止悪修善の心も、大小権実のさとりも、かつて心にかず、起立塔像の善も、この位にはかなふべからず。捨家棄欲の心も、このときはおこりがたし。まことに極重悪人なり。更に他の方便ある事なし。もし他力の領解もやある、名号の不思議をもや、念じつべきと、をしふれども、

苦にせめられて、次第に失念するあひだ転教口称して、汝若不能念者、応称無量寿仏といふとき、意業は忙然となりながら、十声仏を称すれば、声々に八十億劫の罪を滅して、見金蓮華、猶如日輪の益にあづかる也。この位には機の道心もなく、定散の色どり一もなし。ただ知識のをしへにしたがふばかりにて、別のさかしき心もなくて、白木にとなへて往生する也。

としている。ここにおいて、證空は『大經』第十八願に説く称名や『觀經』下品下生の五逆重罪に勧める称仏は、何の色どりもない白木の生地そのままの白木の念仏であると言うのである。衆生の中には、その環境に応じて止悪修善をはじめ、大小乗を問わず少なからず自らを高めべく修道に励む者もあるわけであるが、そのような人々はいくまでも自力によって三業を色取ることとなり、最終的には自力に迷う存在だとする。これに対して下下品の者のように無善悪業の凡夫には、それまでの自身の作業に期待する術も無く、死苦に責められて何一つゆとりのない状況での善知識の勧めに素直に従う称名で

あり、これを白木の念仏と説くのである。

さらに、『述成』には、<sup>13)</sup>

願行具足の名号を唱へながら、安心をも願行の不足なる様に思ふは儂き事なり。譬へば万の宝の充ち満ちたる蔵を父の手より得て持ちながら衣食を如何せんと思はんが如し。ことわりを知らざる人は、機の方より仏の願に取り付かんと思ふ。能く能く他力を心得て見れば、仏の方より衆生の往生を成じ給へる、南無阿弥陀仏の名号に、兆載永劫の行成じ玉はずば、我等が往生は思ひ切らまし。何ともなき妄想顛倒の心なれども、南無阿弥陀仏と唱へ奉れば、仏の五劫思惟兆載永劫の願行が、残らず此の中に納まる故に、さながら仏の恩徳にて、此の度生死を離れんずる事よと思ふ故に、すべて我が心の善悪にかかはらずして、適かかる機を渡し給ふ大慈大悲の忝なさよと思へば、我等は常没常流転の悪ながら、やがてその心の底に、是をすてたまはぬ仏の慈悲の万徳が充ち満ちたりけるよ、と思う故に、あまりの嬉しさに南無阿弥陀仏と称ふるなり。

とも述べ、我々衆生の機根は、たとえ願行具足の名号を唱えていたとしても、未だに安心や願行が不足しているなどと考えて弥陀の本願の道理を知らないままにいつまでも自らの側から仏の本願に関わろうとする存在であるとする。また、もし弥陀の他力を心得ることが出来れば、衆生の往生を思い極めた名号が発動するところをもし仮に法蔵菩薩の兆載永劫の行が完成していなければ・・・などと、いつまでも疑いの心を生じて自らの往生を断念しなければならぬのではとまで考えるのであると言えるのである。このように我々の心は妄想顛倒の心ではあるけれども「南無阿弥陀仏」を称えることが出来れば、仏の五劫思惟兆載永劫の願行すべてが名号に納まり、仏の恩徳により生死を離れることが出来ると思えると共に大慈大悲の功德が満ちあふれていると感ずることができ、その時、あまりの嬉しさに「南無阿弥陀仏」と称えるとする「うれしさ」のあまり称える念仏を説くのである。

## 結びにかえて

以上「西山證空の念仏觀」と題して、證空が法然の勧めた称名念仏をどのように捉えるかを取り上げ、「念と声」、「不相捨離」、「念仏の意義と觀經の念仏」、「願行具足と行願具足」、「行願具足に基づく名号觀」、「證空の説く念仏」を観点として證空の念仏觀を考えてきたが、そこには證空が阿弥陀仏と衆生の關係をどのように捉えていたかを知ることが最も重要だと言えるのである。すな

わち、善導釈の「彼此三業不相捨離」に関して阿弥陀仏と我々凡夫との不相捨離を示したが、證空は相応する身口意の三業について我々衆生の所作、礼称念のいずれをも衆生が修めた結果としての功德が、その往生の因となるのではないとするのであって、六字名号についても行願具足と説くことで、願も行と共に弥陀に付け、我々衆生に必要なことは絶対他力の名号、弥陀正覺の謂われを理解することだとするのである。弥陀の正覺を知る事は、證空教学における阿弥陀仏觀を意味し、それは『觀經』所説の三心觀であり、領解の一心とも言えるが、延いて

は『觀經』十六觀の施設は釈迦觀門として弥陀弘願の謂われを我々衆生に気付かせる働きをし、この働きによって他力に帰入したところに證空の説く離三業・白木の念仏があり、また、あまりの嬉しさに「南無阿弥陀仏」と声に称える念仏があると思われる。

## 注

- (1) 新纂浄土宗大辞典 一一九一頁
- (2) 西山叢書第四卷 一七一頁
- (3) 西山上人短篇鈔物集 一二九頁
- (4) 西山上人短篇鈔物集 一三二頁
- (5) 西山上人短篇鈔物集 二二二頁
- (6) 西山上人短篇鈔物集 一八一頁
- (7) 西山上人短篇鈔物集 一九五頁
- (8) 大正新脩大藏經第三十七卷 二五〇上
- (9) 西山上人短篇鈔物集 八〇頁
- (10) 西山上人短篇鈔物集 一八六頁
- (11) 西山上人短篇鈔物集 二〇八頁
- (12) 西山上人短篇鈔物集 二四一頁
- (13) 西山上人短篇鈔物集 八四頁